

詩篇63篇より

0 ダビデの賛歌。彼がユダの荒野にいたときに

- 1 神よ。あなたは私の神。私はあなたを切に求めます。水のない、砂漠の衰え果てた地で、私のたましいは、あなたに渴き、私の身も、あなたを慕って気を失うばかりです。
- 2 私は、あなたの力と栄光を見るために、こうして聖所で、あなたを仰ぎ見しています。
- 3 あなたの恵みは、いのちにもまさるゆえ、私のくちびるは、あなたを賛美します。
- 4 それゆえ私は生きているかぎり、あなたをほめたたえ、あなたの御名により、両手を上げて祈ります。
- 5 私のたましいが脂肪と髓に満ち足りるかのように、私のくちびるは喜びにあふれて賛美します。
- 6 ああ、私は床の上であなたを思い出し、夜ふけて私はあなたを思います。
- 7 あなたは私の助けでした。御翼の陰で、私は喜び歌います。
- 8 私のたましいは、あなたにすがり、あなたの右の手は、私をささえてくださいます。
- 9 しかし、私のいのちを求める者らは滅んでしまい、地の深い所に行くでしょう。
- 10 彼らは、剣の力に渡され、きつねのえじきとなるのです。
- 11 しかし王は、神にあって喜び、神にかけて誓う者は、みな誇ります。偽りを言う者の口は封じられるからです。

詩篇は「祈り」を学ぶための最良の書と言われますが、本篇はその中でもとりわけ神に対する親しい呼びかけに満ちています。1 節の「**あなたは私の神**」という語りかけは、「あなたご自身が私の神です」と訳してもよい強い表現になっていて、自分の存在とはこの神あってこそのものであり、神なしには人生が安定せず、魂の満足を得ることはできないという思いが込められているでしょう。人間とは神を礼拝すべき存在として造られており、礼拝から遠ざけられることほど辛いことはない。これは、神と共に生きている人にしか分らない感覚です。

本篇がどのような背景の下で歌われたのかについてはいくつかの説がありますが、素直に読むと著者はダビデであり、11 節で自身を「**王**」と呼んでいることから、王という身分のまま王宮を追われた状況が見えてまいります。おそらく、息子アブシャロムの反乱により都落ちしたとき、「**ユダの荒野**」に身を寄せた状況が背景にあるのでしょう（Ⅱサムエル 15-17 章）。

この民がみな進んで行くとき、国中は大きな声をあげて泣いた。王はキデロン川を渡り、この民もみな、荒野のほうへ渡って行った。（Ⅱサムエル 15:23）

本篇の特徴は、神に対する詩人の強い飢え渴きの表現です。「水のない、砂漠の衰え果て

た地で、私のたましいは、あなたに渴き、私の身も、あなたを慕って気を失うばかりです」（1節後半）という部分は、彼が居た場所がまさに砂漠のような不毛の地であったことを表していると同時に、今まで礼拝を守ってきた場所から追いやられた「神から離れてしまったかのような感覚」を表してもいるでしょう。礼拝に集いたい。仲間の聖徒たちと共に賛美をしたい。御言葉に静かに耳を傾けたい…。コロナ禍で礼拝堂に集まれなくなった私たちの状況とも類似しているのではないのでしょうか。

しかし、詩人は気づいたのです。たとえ場所は幕屋の「聖所」でなくても、神の「力と栄光」を「仰ぎ見る」ことができるのだと（2節）。もちろん礼拝そのものに聖徒たちと共に集まる以上の恵みはありません。しかし、やむを得ぬ状況下に置かれても、神と自分の関係が変わることはない。3～4節の賛美の言葉は、本当に荒野で発せられたもののなのでしょう。

あなたの恵みは、いのちにもまさるゆえ、私のくちびるは、あなたを賛美します。それゆえ私は生きているかぎり、あなたをほめたたえ、あなたの御名により、両手を上げて祈ります。

5～8節では、詩人が神との交わりによって魂の底まで満たされた表現が繰り返されます。「脂肪と髓」（5節）とは、犠牲の中の最上の部分であり、神にささげられるべきものでした（レビ3:16、7:23）。その最も美味しい所を神が分け与えてくださった、そういう感覚を覚えたのです。「夜」「床の上」（6節）で神を思う幸いを味わったことがありますか。眠りに就くとき、私たちは翌朝本当に目覚めることができるか分からない一種の不安を覚えることがあります。寝ているとき、人は全くの無力な状態になるからです。そのような状態に入っていく自分を神に明け渡す祈りを毎晩ささげましょう。そのとき、神が「御翼の陰」（7節）で私たちをかくまってくださっていることを知ることになります。神に「すぎる」者を、神は力強い「右の手」で支えてくださるからです。

9～11節では、詩人の命を付け狙う人々に対する神からの報いが予告されています。この中で印象深いのは「きつね」（10節）という表現です（聖書協会共同訳では「ジャッカル」）。ジャッカルは食べ残しをあさるイメージの悪い動物ですが、「偽りを言う者」（11節）は「残り物」のように何者かによって食い尽くされてしまうということが言い表されています。事実、アブシャロムの結末は、木に宙吊りになったところを刺し殺されるという無残なものでした（Ⅱサムエル18章）。

詩篇63篇は短くも「最も美しい詩篇」と呼ばれています。その所以は、やはり神に対する限りなく親しい語りかけにあるでしょう。「私のたましいは、あなたに渴き、私の身も、あなたを慕って気を失うばかりです」（1節後半）。狂おしいほどに、恋人の声を慕い求めるのにも似た、神に対する詩人の叫びでした。私たちの心を潤すものとは何でしょうか。「生ける泉」とは神ご自身であることを忘れないでいたいのです。

イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでも、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」（ヨハネ4:13-14）